

大熊町を

端から端まで

知りつくそう!

ふるさと
再発見
旧地名を訪ねて

●第2回 小入野地区
(〒979-1302)



小入野地区は国道六号線が大和久を東西に分け、沿線に娯楽施設を有する田園地帯です。

東平は工業団地として発展

し、企業七社・総従業員約二七〇人(十七年三月末現在)が稼働しています。又、西大和久、向畑は近年、住宅地として発展しています。

太平洋

小入野地区新旧字名一覧表

新	西大和久	東大和久	東平	向畑
	北大和久の一部	荒田の一部	飯島の一部	荒田の一部
	中天和久	頭森	北原	飯島の一部
	南大和久の一部	北大和久の一部	腰巻の一部	南大和久の一部
		南大和久の一部	坂下の一部	北沢の一部
		北沢の一部	梨木平	腰巻の一部
旧		腰巻の一部	西原	坂下の一部
		二枚橋	野馬形の一部	野馬形の一部
		札打沢	橋本	南沢の一部
		南沢の一部	ひろ内	南沢平
			ひ日向	
			みや前	



(5月30日現在)

人口	男	女	合計
西大和久	123	107	230
東大和久	397	387	784
東平	99	104	203
向畑	168	163	331
合計	787	761	1,548

小入野地区と日隠山

鎌田 清衛

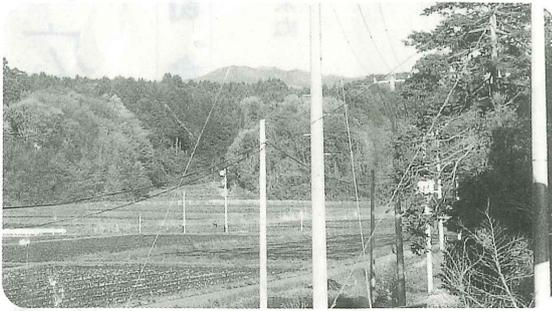
わが町の各地から眺められ親しんできた日隠山が何故、日隠山と呼ばれるようになったのだろう。小さい頃から誰に聞いても「昔からそう言うてきたから」としか答えてくれなかった。

日が隠れるとは日没を意味していることは確かであろう。では誰が、何処でよぶようになったのか。そんなことを考えながら二十余年になるうか。エジプトのピラミッドでは玄室に夏至の陽光が差し込むというのを聞いたことがある。きつと日隠山も陽が落ちる時に関係しているはずだ。

私は、夏至、冬至、春分の日、秋分の日、日隠山の落日を調べてみることにした。

春分、秋分の日、昼夜の長さがほぼ等しいということは太陽もほぼ真東から昇り真西に没するはずである。

平成十年の春分の日、よく晴れていたのを期待しながら日没前の短時間を夫沢から熊川まで車で移動し、野馬形地区のある一点で日隠山に沈む



小入野地区から見える日隠山

大きな太陽を確認することが出来た。自宅に戻りながら以前に読んだ本の中に、中国地方のいくつかの遺跡が同緯度にあつた、というようなことを思い出し、早速、町内地図に日没を確認した地点と日隠山を結ぶ直線を引いてみた。この線上を辿ると日隠山の日没が見えるはずである。小入野海岸北端の崖に近いところまで日没を確認できる直線は伸びた。この線上にあつても大川原地区では前の山がささぎっていて見えない。落合橋

周辺では見ることができ。また、小入野地区の高台には海渡神社がある。一方、真西にあたる大川原地区には大山祇神社があり、日隠山から東西ほぼ一直線上に対峙している。小入野地区から見える阿武隈山脈の南端の山がこの山であつた。

このような事実からみて小入野海岸から落合橋までの地域の人が、誰言うことなく「日が隠れる山」という意識から「日隠山」と言うようになったのではないかと思われる。

平成十五年の春分の日、日隠山の日没の瞬間を海渡神社の御神体安置の神殿部分と一直線であることを確認し、改めてびつくりした。

時計など時を知る術の少なかった時代の先人達が「暑さ寒さも彼岸まで」と、農耕や漁業の生活に即した目安として自然に親しみ自然と共に生計を営んでいたものと思う。

私たちは自然に逆らって生きることは出来ない。身近な自然、里山のある自然を大事にしていきたいものである。

鶴が森・亀が森（民話）

むかし。

小入野の里は海の水が細長く入りこんで、人々は周囲の高台に四々五軒ずつの家をつくり、貝や魚、山野から鹿やその他の動物を捕らえて暮らしていました。

そのうちにだんだんと海の水が引いて、谷あいには小川が流れるようになったので今度はこの水でお米をつくって食べるようになりました。

海の水が引いたとき小川に沿った谷間に二つの丘が浮かび出て、松やその他の木が育ちはじめました。

上手の丘には鶴が多く集ま

て住んでいたので、里の人々は鶴が森と呼ぶようになりました。

川下の丘は海に近いので、多くの亀が上がって来ては群れ住んでいたので亀が森と呼ばようになりました。

里の人々は、鶴と亀ほど吉祥なものはないというので、鶴が森と亀が森を部落発展の象徴として残すようになりました。

「なんでも、ペリーという亜米利加の隊将が黒船に乗って来た頃だというから百年以上も前のことだつて、大島から椿の種を一杯積んで仙台藩に運ぶ船が熊川沖で難破してな、熊川から小良浜の浜辺に椿の種がいっぱい打ち上げられたのを、椿の木は浜風に強いし、椿油は貴重なので植えたのが小良浜と小入野の椿並木だよ」

里の古者は、鶴が森・亀が森と並べて椿並木をこのように語っています。

（民話 苦麻川第十九話より）



小入野川河口附近、この先に鶴が森・亀が森があつた